はうわーっと泣き出し、一生懸命に傷をなでてくれたのだそうです。

「先生、生きててよかった。人は自分のことしか考えていないから苦しむ。他人のために何かをすると『ありがとう』という言葉や思いが返ってきて、自分は必要とされていると感じる。それが生きる力になる。人は誰かを幸せにするために生きなくちゃいけないんだね」。彼女は弾んだ声で伝えてくれ、私はうれしくて、「私の学校からは卒業だね」と言いました。

大人は、子どもが高い階段を上ることができなくなった時、しゃがんで階段の一部を作ってあげられればいい。上ることができたら私は静かに去ろうと思っています。しかし今も、暗い夜、カミソリを手にする10～20代の子どもたちは増え続け、１００万人を超える子どもたちが死に向かっています。私たちにできることは、親の過剰な期待、虐待、学校でのいじめ、人間関係の悪化、ＰＴＳＤといった、死に向かわせる原因を、そばにいて取り除くことなのです。

私は宗教の力を借りる働きかけを始めています。すべての宗教施設を子どもたちに解放してくれるよう呼びかけたところ、応えてくれる寺社が多数出てきました。教会は24時間扉が開いていますね。日本人には、伝統的に宗教の力を畏怖する心があるため、その空間にいる間は命を絶つ行為ができません。そのような力を借りることも大切だと思っています。

好きで非行に走ったり、引きこもったりする子どもはいません。昼の世界で、たくさんの愛の中で生きたいのです。子どもは、学校や教育委員会や行政ではなく、身近にいる生身の大人に救いを求めています。そばにいて話を聞き、一緒に笑い、考え、涙を流して悩み、共に生きてくれる大人を求めているのです。

優しさと生きる力を育むために

私は最近、平和であるべき昼の世界に、夜の世界のイライラ、攻撃性が入り込み、子どもを追いつめているのではないかと恐れています。先ごろ、新聞に悲しいアンケート結果が載りました。アジア各国の子どもたちに「最も心休まる場所はどこか」と質問した答えです。日本の中学生で1位に家庭と答えた子どもは14％、高校生は５％。学校は10位以下です。日本の多くの子どもたちにとって、昼の大半を過ごす学校、最後のよりどころとなる家庭が安らぎの場ではないのです。

今、日本の子どもたちが大人に突きつけている４つの大きな問題は、いじめ、不登校・引きこもり、心の病・自殺、非行犯罪です。私はここに昼の社会のイライラ、攻撃性をみます。私は怒りや悲しみに満ちた社会をつくってしまった大人たちを代表して、子どもたちに、「本当にごめん」と謝ります。バブル崩壊以降続いている長い不況の中、大人は外の世界で受けたイライラを子どもにぶつけています。人は認められることで自己肯定感を持ち、受けた愛や優しさが深いほど、たとえ傷つくことがあってもその傷は浅くて済むのです。子どもたちは愛や優しさを待っています。ぜひ美しい言葉に満ち、子どもを認める家庭をつくってください。先生は生徒をほめてください。

金曜と日曜の夜は、最も自殺が多い魔の日です。金曜は、５日間通った学校で疲れ果て、日曜は、地獄という学校が始まる前日だからです。子どもと離れて住む人、おじいちゃん、おばあちゃんは、定期的に「お前のことが大好きだ。つらい時は我慢せず、熊本に逃げてこい」と、電話をしてあげてください。一本の電話が尊い命を救います。そして、一生に通じる優しさを育て、子どもたちの生きる力となるのです。

講演を行ったある中学校では、生徒から「自分たちに薬物や魔の手が近づいてこない方法はありますか」と尋ねられました。私は笑顔とあいさつだと答えました。そうしたら、自主的に地域の人々に笑顔で声をかける活動が始まったのです。するとある日、近くに住む一人暮らしのおばあちゃんから手紙が届きました。「子どもたちが笑顔でゴミ出しなどを手伝ってくれるようになり、年寄りの心に花を咲かせてくれた」というお礼だったそうです。

私は、今、８・３（はちさん）運動を進めています。子どもたちが登下校する午前８時と午後３時に、できる限りの大人が外に出て子どもたちを優しい目で見守り、声をかけようという運動です。この熊本でも、朝夕に多くの大人の優しい声と目が子どもたちを覆ったとしたら？　熊本で育った子どもは人の優しさを信じ、人に優しさを配れる人になれるでしょう。子どもたちの心は澄んでいます。大人も頑張ってみませんか？　次に来た時、私は熊本が人々の思いやりに満ちた街になっていることを信じています。

水谷　修さん

１９５６年横浜市生まれ、上智大学文学部哲学科卒業。横浜市で高校教員として勤務。12年間を定時制高校で過ごす。深夜の繁華街パトロール「夜回り」を通して若者たちとふれあい、非行防止、更生に取り組む。また、子どもたちの不登校や心の病、自殺などの問題に関わり、講演などを通して今の子どもたちが直面している問題について訴えている。花園大学および関西大学客員教授。

先生の言葉を胸に地域の深化を

講演会実行委員長
熊本ＹＭＣＡ理事・常議員
熊本ひがし
ワイズメンズクラブ
歌野　清三さん

講演会当日、阿蘇くまもと空港まで先生をお迎えに行くと、車に乗ると同時に子どもたちのお話を始められました。講演と夜回りを続けられているのに、疲れをいっさい見せず薬物や非行問題について語る先生の姿に、頭が下がる気持ちでいっぱいになりました。

私は警察官として36年勤め、青少年の問題について関わってきました。「子どもの現場に行く」ということは、大人たちは忘れがちな接し方の基本です。ＹＭＣＡの方針であり、地域と深く関わるという「地域深化」にも通じるところです。講演終了後も先生は熊本市内の夜回りに出かけられました。大事なことは、言葉ではなく背中で、行動で見せるものだという先生の姿勢そのものでした。

講演は、１カ月前に整理券がなくなるほど参加希望の方が多く、お断りするのに苦労したほど。先生と皆様のお力で、創立60周年記念イベントの最後を、素晴らしい形で締めくくることができ、大変うれしく思っています。

すすんであかりをつけましょう

講演会実行委員
熊本マリスト学園教師
武井　信さん

先生の講演を聞くのは2度目です。今回強く感じたことは、笑顔やあいさつなどのコミュニケーションで子どもたちの問題が解決へ向かうこともあるということです。

ラジオ番組のスローガンで、「暗いと不平を言うよりも、すすんであかりをつけましょう」という言葉があります。先生の講演を聞いて、この言葉が浮かびました。不平不満を口にせず、子どもたちと向き合い、動く先生の姿は、現代のイエス・キリストそのものだと感じました。講演を聴いていた生徒が涙を流していました。子どもにここまで深く関わる大人がいると知り、感動しての涙だと私は思います。

生徒が毎日の大半を過ごし、私の職場でもある学校が、学ぶ楽しさを見つけ、互いを高め合う場になるように動くことが、教師としての私の役目です。今まで以上に、生徒に笑顔で接し、向き合い、声をかけ、水谷先生のように生徒にすすんであかりをつけていく教師でありたいと思います。

子どもを褒められる大人に

熊本ＹＭＣＡ学院
生涯スポーツ科１年
立石　彩香さん

初めてこの目で見た水谷先生は、遠くからでもわかるほど力強い目をしていました。講演は、笑いがあったり、改めて考えさせられるような内容でした。先生が体験したつらいこと、嬉しかったこと、悩んだこと。どれも私の心に響くものでした。先生は全国から来る子どもたちの悩みと真剣に向き合って、前に進めるようにと背中を押してくれています。こんな子どもたちの苦しみにどれくらいの大人は気付いているのだろうと思いました。

先生は講演を聴きに来ている大人にこう問いました。「子どもを褒めた数、叱った数、どちらが多いですか」と。褒めた数が多い方に挙手した人はほとんどいませんでした。これが今の大人の直さなければいけないところだと思います。

叱ってばかりでは、何か大切なものをなくしてしまうような気がします。講演終了後、私は自分自身について考え、将来は子どものことを分かってあげられる大人になりたいと思いました。